

後藤敏伸 制作・研究の歩み

富山大学芸術文化学部教授 後藤 敏伸

初めに

私が富山大学教育学部美術科に赴任したのは、昭和56年4月のことである。いわゆる56豪雪と呼ばれたその年で、大学構内には大量の残雪が次年度5月になっても至る所に見受けられた。当時の教育学部は、当然のことながら教員養成課程であり、幼・養・小・中・高教員の養成学部であり、美術科とは言え専門性の希薄な学部であったことは否めない。絵画、彫刻、工芸、デザイン、美学、美術教育の領域を満遍なく教授し学生が4年生になると教職系単位取得と平行しつつ専門領域の卒業制作の指導となる。6人の教員で担当してはいたが、一学年20人強の小学校教員養成課程と中学校教員養成課程の学生間には、入学時よりデッサン力の差があり、それを埋める指導を一方で考慮しつつ、専門性を高める努力を惜しむことは無かった。

そのような状況での制作・研究であったと言える。

そして平成17年10月、3大学統合による芸術文化学部への配置換えで、教育学研究科との併任となり芸術文化学部一期生を迎えることになった。より高度な専門性を目指して入学して来た学生諸君の目の輝きは大いに刺激となったものである。

1. 制作・研究の経緯

赴任当初は彫刻領域の担当であったが、文部省からの定員削減要請により退官教員の補充をせず、デザインの授業も担当することになる。その為に文部省内地研究員として筑波大学芸術学系に於いて総合造形芸術の研究に1年間赴くものであった。その経験が後の制作、研究に大きな影響を及ぼすこととなった。その後の二十数年間は彫刻、デザイン（木工を含む）の指導、自身の制作・発表ということになる。また文部省在外研究員としてスウェーデンの芸術アカデミーに於いて環境造形の研究に携わったことも、その方向性を明確にして行った。

私の制作・研究の主たるテーマは、立体造形の存在としての“場”の可能性を探ることに尽きる。

赴任当時は国展の彫刻部に出品を重ねていたが、野外彫刻、環境造形等の美術新語？が巷に溢れてきたこともあり、コンクール形式の彫刻公募展等への出品に自然と興味は移って行くことになる。当時の“美術館から野外へ”という小気味いい響と、スケール感が私の感性を刺激したことは言うまでもない。

2. “場”を特に意識した作品例

平成2年、第4回黒部野外彫刻展に招待出品した「EARTH SHOCK」（写真1）からその方向性は確信へと変わって行く。アースワークと呼ぶこの作品は、大地の亀裂を人為的に造成し、楔を打ち込み当時話題となり始めていた環境問題を提示したものである。芝斜面40数メートルにスコップで亀裂を思わせる溝を掘りFRPによる楔を設置したが、延べ30人に及ぶ人海戦術となった。広大な地面に直接表現をするという試みが存在としての“場”の可能性を意識付けた最初の表現であった。

平成4年、富山県での野外彫刻展の試みとしては黒部野外彫刻展とは異なり、美術評論家の津山昌氏による企画展「'92 富山県 今日野外彫刻展」に於いて招待され出品した「風のベクトル'92」（写真2）は、小矢部市城山公園、つまり城跡の環境に於ける展示形態であった。正に“美術館から野外へ”の典型的な試みであったが、それぞれの作家は選択した場を作品と融合させ、自身の表現空間に仕上げる想像性を明確に意識付けて行くことになった。具象、抽象を問わず、官展、在野も入り混じり実力者による競演となったことは、富山県彫刻史上初めての試みであった。二方向へのベクトルを2点の作品の配置で構成し、背景のムーブマンと重ね合わせて風の流れを表現したものである。

平成5年には、現富山市の企画による個展形式で「—公共空間と野外彫刻—」というタイトルで役所の広場（コミュニティ広場）を表現の“場”に、立体12点を展示空間へと変容させた。今では目新しくは無いかもしれないが、当時は夜間の警備の問題や作品の保険等をどのよう

に対応できるのか自治体との協議には多く時間を費やしたものだ。おそらくその問題は今日に於いても継続している問題でもある（写真3・4）。

平成9年「'97武田家とアートの出会い展」は、主に木の素材を用いた抽象表現作家の3人展である。当時富山大学美術科教授であった中谷唯一氏、高岡短大工芸科教授であった谷口義人氏と私による重要文化財の武田家住居を、彫刻の場として演出するという高岡市文化事業団の企画である。それまで重要文化財に指定された所での作品展示など聞いた事もなく、外回りも含めた広大な空間に、3作家の作品を満たすことは単純に考えても一人に課せられた作品数も、3作家の協調性と個性との闘いから、更に武田家の存在感を無視できる訳もなく苦労した事を思い出す。3作家全ての作品は相談する事もなく抽象形態となり、不可思議な空間を醸し出していった（写真5）。

平成11年「とやま現代作家シリーズ こころの原風景展」は、富山県立近代美術館企画の美術館内での展示ではあるが、それまで野外空間での“場”に自身の制作の方向性を見出しているということからも、例えば美術館内展示であっても通常の展示空間は避けたかった。そこで美術館中央のイベント空間（立体展示にも使われてはいたが）である円形の一段窪んだ場を使用し、更に天井からのワイヤーによる空中展示も併用し、横軸、縦軸の空間をフルに活用した。それが、「秩序化するコドン'01、そして無秩序へ」と題したインスタレーション作品である（写真6）。

同年「Art Gallery in Fuchu'01」（まちなみアトリレー）に於いては、道路に面した某銀行の外壁全面を場と捉え、安全面を十分考慮しての野外インスタレーション表現を試行したものである。この壁面を使った試みは、平成25年「太閤山ビエンナーレ」でも、ふるさとギャラリーの正面外壁でパーツの変更を伴いつつ再現している（写真7）。

平成12年には、企業依頼で工場の正面ゲート・外堀の設計・デザインを行なったが、制作コンセプトは野外

彫刻、環境造形に他ならない。これは彫刻、立体造形の“場”の可能性と言うには少々無理がある様にも思えるが、彫刻、環境造形制作を専門としている以上立体造形のエッセンスは必ず取り込んでゆく。この拘りが“場”の可能性を拡大すると私は考える。この他にも抽象金属彫刻と色ガラスとを組み合わせたゲート及び外堀を制作している（写真8・9）。

平成22年からは富山市環水公園に於いて、富山大学と富山県（観光課及び緑地公園課）との地域連携事業として、第1回GEIBUNオープンエアーミュージアムの開催となった。第2回展から、私の表現の“場”は、水上あるいは水面へと移って行く。水面上に彫刻や立体造形を設置することは通常、状況にもよるが作業困難故好まれることはない。しかし、条件と技術が整えば周囲の環境や空気感、空をも取り込める理想的な“場”であると考えられる。以後8回に渡り、私の環水公園での展示は水上に限るように設置して行った（写真10・11・12）。

平成28年には「環境造景展2016」アートハウス小矢部の企画に於いて、「CODON-2016 Day in OYABE」というタイトルで野外インスタレーションを発表した。緩やかな斜面を使用して一本の重さが20kgの枕木を100本以上使用し、塊とムーブマンを表現し、背景の樹木を利用し幅190cmの布を数十メートルに渡り張り巡らしたものである（写真13）。美術館の大きな開口部のガラスを通して内側から鑑賞できるよう配置し、更に広大なクロスランド小矢部の広場に集う人々にも鑑賞できるようなポジショニングとなっている。

平成30年に大手企業の依頼により設置することになったモニュメント「REBORN-2018」（写真14）は、野外の設置場所を、制作者である私に決定できた事も幸運ではあったが、テニスコート6面分以上はある平坦な芝生上にオールステンレス（一部純金メッキ）の抽象彫刻を設置面積30平米の余裕ある存在としての“場”を獲得し制作できた。

3. 制作者としての興味と関わり

このように、存在としての“場”の可能性を研究テーマとして制作を続けているが、当然美術館や、ギャラリーでの制約を意識した作品制作も平行しつつ発表して来た。どちらも私にとっては重要な発表の場である。

また、制作者としてのその時々発表の興味と関わりも様々である。海外（スウェーデン、中国、タイ等）での彫刻シンポジウムへの参加、企画個展、グループ展やコンクールへの応募、公募団体への出品などが主であったが、特に記載しておかねばならないものは、自身で企画・運営し10年に渡り継続してきた展覧会がある。

「触展」という、触れて鑑賞のできる展覧会である。それまであまり展覧会への鑑賞機会が無かったであろう視覚障害者の方々や、車椅子の方々などの積極的参加を推進するという試みである。美術館では作品に触れることが作品の保護や防犯等の意味合いからも致し方無い対応になっている。そのことがどうしても美術鑑賞への抵抗感が生じていたことも確かである。私がスウェーデンに在外研究で滞在していた折に、ストックホルムの近代美術館が移転し新しく建設途中であった。隣接の建物が私の研究拠点である王立美術大学であった事も幸いし、立ち入る機会を得た。直近のバス停からは少々小高い場所に建てられているが、緩やかなスロープでアプローチが美術館入り口まで続き、中に入るまで段差は皆無であった。内部のフロアーにも段差は認められず、車椅子での鑑賞が何の不便なく可能な造りになっていた。20年以上も前の事ながら、何人をも拒否する事のない公共施設の在り様に感銘を受けた事が始まりであった。帰国後直ちに、平面、立体を問わず触れることを前提とすることに賛同してくれる作家を募り、平成14年に第一回展を開催した。10回の連続開催後、現在はマンネリ化を防ぐためにも冷却期間を置くこととしインターバルを、新たな「触展」を目指すために敢えて取っている。

4. おわりに

38年間、富山大学教員として過ごしてきた事になるが、同時に制作者として作品の発表は“場”の可能性を探るという研究テーマに沿って行ってきた。その事はこれからも継続していく課題ともなる。終わりの無いこの興味あるテーマは、私に何を与えてくれるのだろうか。



写真1-1

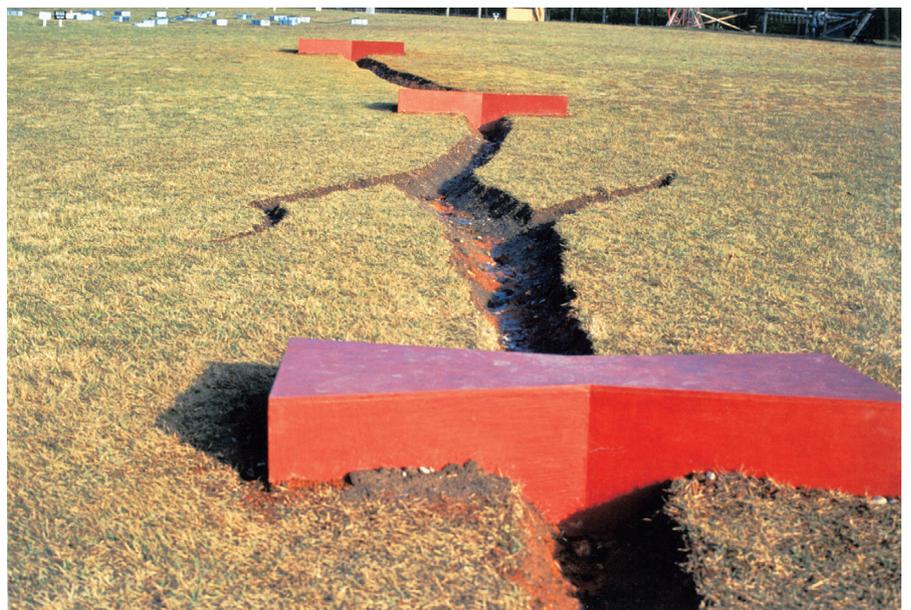


写真1-2



写真2



写真3



写真4



写真5-1



写真5-2



写真6

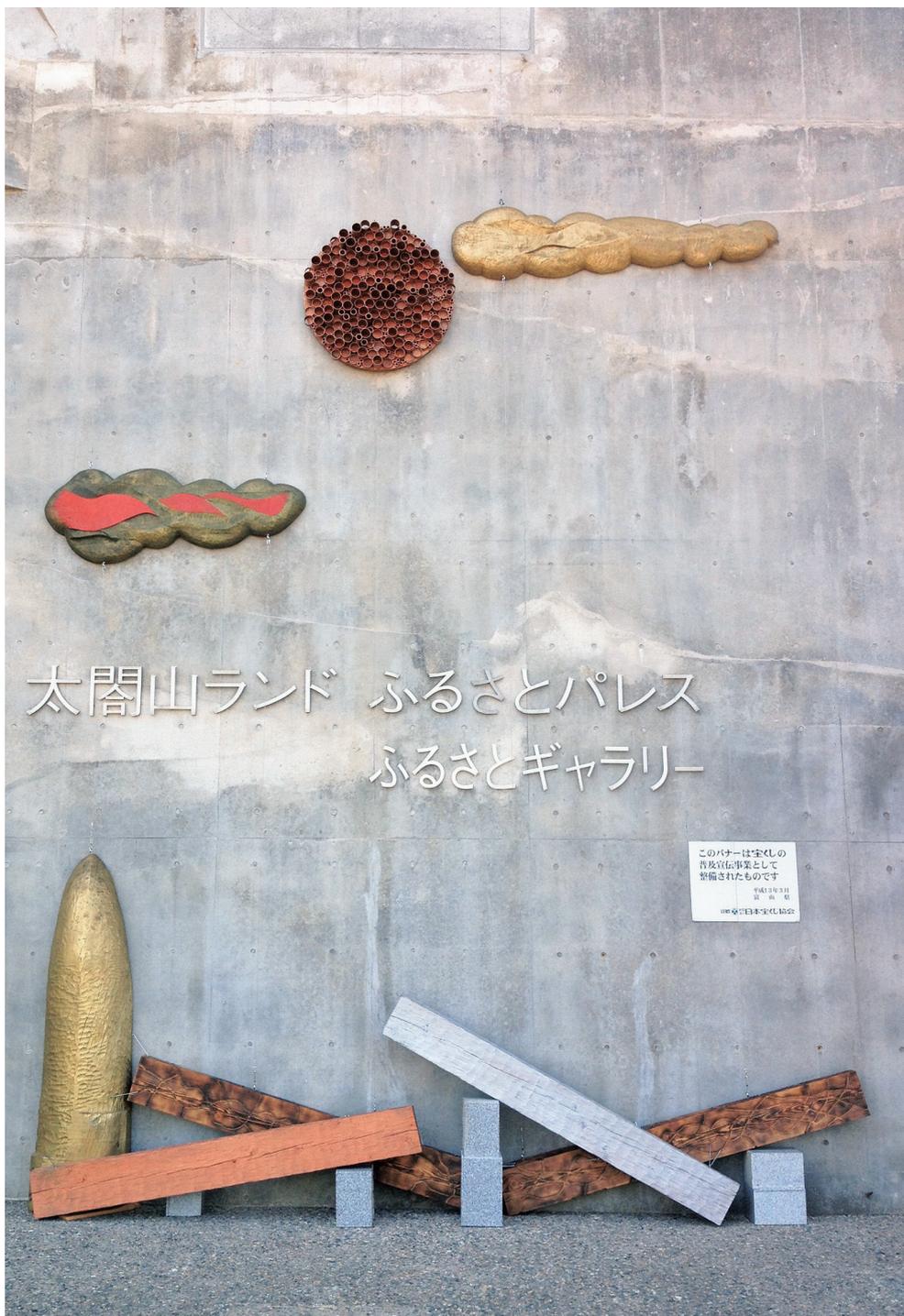


写真7



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14